

#### 【4. 芸術作品における個別的意図】 pp.94-97

※この章を読むために前提となる事柄の確認

### そもそも、なぜ渡辺は「語用論」に着目したのか？

そもそも渡辺が「語用論」に着目したのは、語用論が意味作用の源に〈広義の「作者の意図」〉を前提とするから。それを音楽における意味作用発生の仕組みの理論に援用しようとしたため (c.f. p. 84)。

「プラグマティクス (※ = 語用論) は、……、いかなる意図をもって発話者がその発話行為を行ったかを問題とすることによって『言外の意味』 (※ 記号全般) をも自らの射程のうちにとりこんだのである。

### 下 A, B 2つ合わせて、いわば 〈広義の「作者の意図」〉。

#### A. 「作品として世に出そうとする意図」 (= 一般的意図)

= 「不特定の時空の中にある不特定の相手」に聴かせようとする意図 (p.92)

= 「作品という自律的世界を構築する」意図 (p.93)

= 一般的意図 = 「協調の原理」

「芸術家が行う『協力』は作品をそのような自律的世界として構成するために最善をつくすことである」 (p.93)

#### B. いわば、〈狭義の「作者の意図」〉 (= 個別的意図)

= 表現において「そこで実際に交わされる意図」 (p.92)

= 具体的に伝達させることを意図する内容。

= 「全体の有機体的構成に寄与するように形作る」もの。作品上の「個々の部分」 (p.95, 渡辺の解釈としての「個別的意図」)。